

特別インタビュー ●やまびこ会主宰・山田 暁生先生

通信づくりは教育活動そのもの。 「保護者・子どもたち・教師」三者の コミュニケーションや相互理解に 大きな効果を発揮する。

通信づくりをどう考えたらよいのか。また、具体的にどう活動したらよいのか。35年の中学校教師生活において、ほぼ毎日「学級通信」を発行し続け、また現職時代から退職後の現在に至るまで、全国の先生方呼びかけて学級通信のつくり方や教育のあり方について交流を広げている山田暁生先生に、その豊かな経験を基にした知恵をうかがった。

言葉に表せないほどの 効果や力がある

——先生は35年に及ぶ教師生活で、欠かすことなく学級通信を発行してきました。どのような心構えで続けてきたのでしょうか。

山田 私の著書にも記していることですが、基本的な考え方は、学級通信をつくること自体が教育活動であるということです。

教師は子どもたちの成長を願っているし、また保護者との強い信頼関係がほしいと考えています。しかし、子どもたちの成長を促し、保護者との強い信頼関係をどのように築くか。そう考えたときに、ベースにあるのは保護者と子どもたちと教師、この3者のコミュニケーションであり、相互理解ですね。これがいちばんの栄養にな

り、大切なことです。

こうしたコミュニケーションや相互理解のために、学級通信は大きな力を発揮すると信じて続けてきました。ここで、その一つひとつを紹介するわけにいきませんが、大きな効果がありました。

私は日刊で学級通信を出していました。毎日ですからたいへんな面はありますが、こうすることで私が何を考え、何をしようとしているか、子どもたちも保護者も十分に理解してくれます。

もちろん学級通信と並行して、保護者会も頻繁に、年に15、16回と開きましたが、日ごろから畑をまめに耕していると、作物はいつの間にか育っているものです。教育的効果は必ずあるということですね。

ですから、私は通信活動を「やりなさい」と強制したことはありませんが、しようという先生には、「まず、

やってごらん。損はしないから」と勧めます。言葉に表せないほどの効果や力があるから、と。

ウォッチすることで 題材はいくらでも発見できる

——日刊で発行するということは、たいへんなことのように思えますが。

山田 毎日出すほうがかえって長続きすると思います。リズムができるから、この方がラクです。

週に1回という発行間隔にしておくと、今日は忙しいから明日にしようとか、今週中に出せばいいやとか、なりがちです。月に1回などという、逆に1ヵ月分の情報を1回でまとめようとするこのほうが難しくなります。



「みんなで教育を考え、語り合う広場にしたい」と1986年4月に発足した「やまびこ会」。全国各地の教師による学級・教科通信の実践交流の場ともなっている。現在250号を超える会報『やまびこ』は、B5判8ページで毎月会員に送られる。



山田 暁生先生

1960年より35年間、中学校数学教師として生徒を指導する中で、学級通信、学年通信、数学通信、進路通信などを発行。保護者や生徒とのコミュニケーションに力を入れてきた。現職時代から全国教育交流会「やまびこ会」を主宰して「月刊やまびこ」を発行。1995年退職。「月刊やまびこ」は今年1月号で創刊21年、250号を迎えた。山田中学生問題研究所代表。読売新聞社インターネット教育相談員。「子どもの長所の見つけ方伸ばし方」(学陽書房)、ほか66冊。
E-mail ya-117@w6.dion.ne.jp

日刊であるがゆえに訂正もすぐにできます。自分はあのときにこう考えたけど、いろいろと考えてみるとやはり考え違いだったとすぐに訂正できる。つまり、私の指導や考えに対して、保護者も一緒に走ってくれるわけです。その意味で日刊で頻繁に出すことは、非常に意味がありますね。

よく毎日だとネタ(題材)探しに困るのではないかと言う人がいますが、それはまったく間違いですね。ネタはたくさんあります。学級担任だったら、朝、必ずクラスに行きますね。そのときに見つけようと思えばいいんですよ。そうすると、何を見つかるかが自分に課されるわけです。

もちろん教室や子どもたちを、ただ見ているだけではダメです。要するにウォッチすることです。私がしばしば例に出すんですが、観光は英語でサイトシーイング、鳥の観察はバードウォッチングですね。観光をサイトウォッチングとは言わないし、野鳥観察はバードシーイング

グといいません。ではシーとウォッチはどこが違うのか。ウォッチは、こちらの心を働かせて、あそこはどうなっているのか、ここはどうなのかと、観察することですね。あの鳥のくちばしの先はとがって長いな、なぜだろうとか。サイトシーイングは、あきれいだね、で終わっていくものです。いま見えるものを追いかける。だからウォッチとまったく違います。ウォッチは見えないものを見る、見つけ出すことです。

要するに、ウォッチする心を持って、焦点をしばって子どもたちを見る。そして見えないものを考えていくことです。そうしたことがすべて通信のネタになります。

見つけたネタは捨てない

—— 気がついたことはメモをするわけですね。

山田 そうです。私はいまでもそうですが、いつも小さな紙切れをポケットに入れていて、その時々感じたことをその場でメモします。

つまり、ふだんから課題意識を持ってウォッチするということが重要なのです。もっと深く子どもを見つめてごらん、ということですね。

日刊で発行することと関係しますが、これを毎日自分に課することでウォッチする目が培われていきます。目が培われていけば、日刊で出すことがたいへん楽になりますし、ネタがないなどということはまったくなくなりません。むしろどれを書くかという選択の問題になります。見つけたネタのうちのどれを優先して書いたらよいのか。そういう毎日になります。

書ききれないからといって、ネタは捨てないようにします。私は、メモしたものは通信で文章にしたり、生徒への指導に使ったりしますが、使わなかったものも含め

てすべて長期間捨てずに保存します。

学校での問題や話題にはサイクルがあつて、似たような出来事や問題が子どもたちの生活の中で起きます。3年後、5年後に、そのときのメモが役に立ちます。3年前にもこういうことがあつた、と書けるわけです。いわば貯金しておくようなものです。

また、通信だけでなく保護者会の話題などでも困ることがありません。保護者と一緒に考えたいことがたくさん出てきます。私はいつも保護者会が楽しかったし、時間が足りなくて仕様がないう状態でした。

教師の伝達能力が問われている

—— 記事の内容とともに、いかに読ませるかという工夫も大切ですね。

山田 見出しに工夫がなかったり、行間もないようにびっしり書いたり、1行が長すぎて続く行の文頭を探すのが難しかったりする通信をよく目にしますね。

コミュニケーションはツウウェイでないとダメですから、子どもにも保護者にもまず読んでもらえるようなつくり方をしないとけません。

私は、読みたくなるような見出しを先生方も勉強してみませんかと提案しています。行間も適当に空けないと読みにくい。重要なところは文字を大きくするとか、あるいは周辺を開けて目立たせるとかの工夫が必要です。

最近では、パソコンなどの教育機器を使いこなせることが、教師にとってコミュニケーション能力と一体になつていて、新しい教育者、教育とは何かが問い直されていると思います。要するに伝達能力が問われています。

基本的にコミュニケーション能力がないと教師も務まらない時代だと思えますね。